

私は私自身を喰らいつくす

F・ニーチェ

二〇三〇年、七月六日、午後一時。

猪鹿蝶子は、東大大学院歴史研究室にいる。

才色兼備を唱われたミス東大は、大学院に入って二年と四ヶ月が過ぎている。

「天は二物を与えたか」

と教授はみな蝶子に一目を置いたが、その名前だけは天のいたずらとしか思われない。

なぜならもともとの姓は中村という平凡なものであったのに、父親が早世し母親の再婚相手の姓が猪鹿であったからだ。

そんなことはともかく、蝶子は近くのコンビニで買ってきた三個の菓子パンをゆっくり食べながら最終章を読了し、その分厚い本を閉じて、思わず溜息をついた。

同室には、小山と小川と小田の自称三羽鳥の男子学生。

小山が後ろから蝶子に声をかける。

「ずいぶんと古い本を読んだものですね」

蝶子はおもむろに振り返り、

「古い本って、どういう意味かな。

古ぼけて汚い本ということか。

それとも内容が古くさい本ということか。

あるいはもうだれも読まない数十年前の本ということか。

もしくはただの揶揄か」

「いやあ、タイトルを見ましてね。

『死んだる団』って、もうだれも話題にもしないと思ひまして」

小山は苦笑しつつ、他の二人に助けを求める表情をつくった。

そんなことをしても、自分を含めてみんな蝶子に頭があがらないということは解っている。

勉学ではもちろん頭があがらないが、そのうえみんな蝶子に岡惚れしている。

岡惚れしていて頭があがるわけではない。

小川がそれでも頭をかきながら、

「じつは、その本を猪鹿さんに貸したの僕なんですよ。
父親の書架にあったので、アナログの猪鹿さんなら喜ぶと思って」
これも藪蛇だった。

「アナログって、どういう意味かな。
私はデジタルが苦手で、電子出版本なんか読まないってことか。
それとも黴が生えた本は私にお似合いってことか。
あるいは私の脳味噌がアナログってことか。
もしくはただの揶揄か」

月並な表現でいわゆる非の打ち所が無い蝶子の容顔で、唯一本人が気にしている眉間の縦皺が見られた。

慌ててこんどは小田がなかにはいり、
「解っていますよ、猪鹿さん。」

あなたはアナログ人間なのではなくて、あなたの従妹が生粋のデジタル人間なので、従妹の立場を尊重して、デジタルのことはみんな従妹に頼んでいるんですね」
「ふん」

と蝶子は鼻を鳴らしたが、当たらずとも遠からずで、蝶子の従妹の美村麗子は、
〈未来計画カンパニー〉が経営している〈鎌倉PC学園〉の学生である。

姓名はきれいだが、容姿はお世辞にもきれいとは言えない。
それもあって、蝶子は麗子のプライドを大事にしてきた。

一段落して、小川が蝶子に尋ねる。

「それにしても、『死んだる団』というノンフィクション大作を、よく数時間で読破できましたね」

蝶子は即座に答える。

「登場人物が魅力的なのさ」

「高杉京平、藤上吾郎、辻中亀夫など。」

死んだる団のメンバーはたしかに個性的ですからね」

「それよりも主役クラス」

「そう、そうでしょうとも。」

探偵の麻暮正作、舟木英介、刑事の山風順一、花井健太」

「それもいけるけど、影の主役」

「まさか、荒野大三郎」

「それが、そうなんだよな」

「荒野さんが魅力的、ですか」

間髪をいれず小田がちゃちをいれる。

「でも僕たち、イケメン三羽鳥ほどではないでしょう」

「ふん」

蝶子はまた鼻を鳴らした。

(この三人は、その名のとおり、器が小さい)

三羽鳥どころか三馬鹿大将だと思ふときがある。
(荒野大三郎は、まさに巨人だ)

器が小さいだけでなく背も小さい小川が、
「どう鼻屑目に見ても、荒野さんは悪人でしょう。
僕なら、善人の麻暮さんがいいな」
「キミは、それだからダメなんだ。
本当に荒野さんは悪人で、麻暮さんは善人かな。
私は荒野さんのなかの善人と、麻暮さんのなかの悪人を見ている」
このとき本を読んでいない小田が、
「荒野さんとか麻暮さんとか云っているけど、ふたりともすでに過去の人でしょう」
小川は小田の平べったい顔の前に手を出して、
「そういう形容は、猪鹿さんの逆鱗に触れますよ。
それに本人に対しても失礼でしょう。
じっさい、僕の情報ではふたりとも健在とのことですから」
このとき蝶子の目が輝いたのを、小山は見逃さなかった。
「ええと、この本の出版日から考えて、もしかしてふたりとも百歳前後ですか」
小山の問いに小川が答える。
「鎌倉の〈未来コスモス院〉という介護施設に、麻暮さんの手下だった小林さんが入っています。
その小林さんが八十歳を越えているとのことですから、年齢不詳でも見当はつき
ますよね」
「それは凄い。
それでは作者の山内参三も百歳前後ですか」
「山内さんは作家を引退して、健在ですが面会拒否らしいです。
探偵の舟木さんは九十歳くらいですが、外国在住だそうです」
「ということは、猪鹿さんがもしも荒野さんに会いたいとしたなら、あるいは荒野
さんのことを聞きたいとしたなら、ツテは小林さんだけですか」
「そうねえ。
小林さんにとっては荒野さんは敵ですから、麻暮さんのことは話しても荒野さん
については何も語りたがらないでしょうね。
それと、荒野さんが社長だった〈未来計画カンパニー〉は、現在は荒野さんの曾
孫の岬美々さんが継いでいます。
岬さんは、猪鹿さんの従妹さんが通っている〈鎌倉PC学園〉のオーナーでもあ
ります。
しかし岬さんは、荒野さんのことをまったく知らないと云ってもいいらしいです」
「それなら、暗中模索、五里霧中ですか」
「いや、小林さんは語らなくても、麻暮さんなら語るでしょうね。
好敵手を語るということは、歴史が証明しています」

「でも、麻暮さんに会うのは、荒野さんに会うのと同じくらい困難なのではないでしょうか」

「やっぱり、暗中霧中、五里模索ですね」

「じつは『死んだる団』には続編があって、これもノンフィクション大作です」

このときまた蝶子の目が輝いたのを、小山は見逃さなかった。

蝶子は自分の興奮を抑えるために、わざと冷然とした顔と声で小川に聞いた。

「タイトルは、作者は、出版社は」

小川は宙を凝視して思い出しながら、

「タイトルは、たしか『巨人荒野』でしたね。

作者は、山内さんの大学の後輩で、ええと、ちょっと待ってくださいね、難しい名前なので。

それに、有名な山内参三先生とちがって、なにせ無名ですから。

無羅でなく、綺羅でなく、魔羅でなく、そうそう、陽羅と書いて、ひら、陽羅義光さんです。

これも『死んだる団』同様に、すでに数千枚のものですが、まだ未完なので、本にはなっていません。

全作家協会という文学団体の、HP内で読むことができます。

陽羅さんも、相当に老齢のはずですが、まだまだ継続掲載されています」

「『巨人荒野』は、麗子に頼んでプリントしてもらおうとして、その陽羅さんには会えるのかい」

蝶子の目は相変わらず輝いていたが、声は静かだった。

「それがその、どういうわけか、僕の姉が、どこがいいのか、陽羅さんの大ファンで、何を血迷ったのか、陽羅さんのあばら小屋が、福島原発の近くにあるというので、発狂でもしたのか、放射能汚染も怖れずに、わざわざ訪ねて行きました。

ところが、偏屈で変態の作家でして」

「レイプでもされたのかい」

「いえ、女嫌いで、会ってくれません」

「私でもダメかなあ」

「僕の姉も、猪鹿さんほどではなくとも美貌ですが」

「そういう意味で云ったんじゃないの。

私は男装が趣味なんだ」

「それは初耳ですが、バレルと思いますよ」

「陽羅さんはホモかい」

「東京に妻子もいるから、そういうことではないでしょう」

「もういい、諦めた」

「猪鹿さんらしくもないですね」

「荒野さんに会うのを諦めたんじゃないで、陽羅さんに会うのを諦めたんだ」

「そ、そうでしょうね、そうでしょうとも」

「ふん」

二〇三〇年、七月七日、午後一時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、鎌倉小町通りの喫茶店「帰路」にいる。

蝶子は世田谷の両親の家を出て、歴史研究の口実で鎌倉山の叔母の家に間借りをしている。

だから「帰路」は初めてではない。

たまたま他に客はいない。

「どうしたのよ、急にいますぐ会いたいだなんてえ。

しかたないから授業サボってきたのよ。

七夕だからなんて、まさか云わないでしょうね」

麗子は口を尖らせたが、目は笑っている。

「云わない、云わないけど、私織姫は牽牛に会いたい」

「牽牛ってことは、麗子じゃなくて男よね。

男に会いたくて、どうして麗子に連絡するのよお」

「あんたの力を借りたい」

「スマホやパソコンでできることなら、何でも協力するわよお」

「その力強い言葉を聞きたかった」

「早く男の正体を云いなさいよお」

蝶子はアイスカフェラテをストローで一口やってから、

「正体が解らないから頼むわけさ」

「名前くらいは解ってるわよねえ」

「荒野大三郎さん、もしくは麻暮正作さん」

「この浮気者、牽牛はふたりいるのお」

「牽牛は荒野さんだけ。

ただ、荒野さんのことを一番解っているのが麻暮さんじゃないかと」

「そういうことですかあ。

では早速、ネットで検索してみるわね」

「それぞれ」

「お蝶さんったら、荒野さんのファンクラブでも作るつもりですかあ」

「そういう気はないね」

「それなら歴史研究の一環としての人間研究ですかあ」

「そういう気もないね」

「愛想もないわねえ」

「ふん」

「出た、出たよお。

荒野大三郎、世間を騒がせた〈死んだる団事件〉の黒幕。

かつて政界の〈ドン〉と呼ばれた松本玄信、美術界の巨匠でその絵は一億円は下らない北山極斎、新興宗教〈愛信会〉の教祖である日下典禅は、荒野大三郎と同一人物。

詳しくは、山内参三著『死んだる団』にて。

以上よお」

「あのね、その『死んだる団』を読んだから、会いたいんだ」

「あらま、そうなの。

それにしても、こんな物騒な人物に会いたいだなんて、お蝶さんも変わっているわねえ」

「私が変わっていることくらい、あんたならよく知っているだろ」

「まあね、ともかく、もっと調べてみるわよお」

麗子はバッグからノートパソコンを取り出した。

「あんたは頼りになるよ」

蝶子はいつもの決め台詞を云った。

「あらまあ。

『死んだる団』には続編があるのね。

『巨人荒野』ですって」

「そのことは聞いている。

あとでプリントしといて」

「げげっ。

これって、紙代だけで一万近くするわ」

「それは、身体で払う」

「どうするのよ」

「あんたの肩をもむ。

相場だと九十分」

「まあいっか。

お蝶さんにそんな長く肩を掴まれたら、肩が鉄になっちゃう」

「肩なら問題ない。

鉄仮面でなければさ」

この言葉に、いままで黙って聞いていた「帰路」の店主立原正男が我慢できなくなった。

「お嬢さま方、口をはさんでもよろしいでしょうか」

蝶子をさしおいて麗子が、お嬢さま口調で、

「はい、なんでもおっしゃってくださいな」

「さきほどから荒野さんとか麻暮さんとかのお名前が出ていますんで、ちょっと嬉しくなっちゃいましたね」

「もしかしてご主人、ご本人を知っていますの」

「さきほどお話に出た鉄仮面は、まさしく麻暮先生でして」

蝶子の目が輝き、麗子はそれを見逃さなかった。

「もしかしてご主人、麻暮先生に会わせていただけますの」

「鵜沼に、探偵の郷田狂介さんの事務所兼お住まいがあります。

その邸宅の別館に、麻暮先生はおります。

ただ、麻暮先生はいま重態とかで面会謝絶、弟子筋の金助さんや金之助さんも会わせてもらっていません。

でも郷田さんは気さくな方ですから、アポなしでも訪ねていけば歓迎してくれますよ。

仕事は夜にやる方ですから、昼間ならいつでも在宅しています」

うなずいた蝶子は、

(将を射んとすれば馬を射よ。

馬を射んとすれば人参を射よ、か)

と思いつつ、麗子を見た。

麗子は手早くノートパソコンを操っている。

「解りましたわ。

郷田探偵事務所は、湘南で大変有名なんですね。

依頼が耐えることがない、ということですわ」

「郷田さんは、江ノ島で窮地にあった麻暮さんを命がけで救った人ですから、このあたりでは知らない者はおりませんよ」

丁度一ヶ月前のこの時間に、郷田狂介、鎌倉署署長の山風健一、小林金助、金助の息子の竹田金之助、釣具屋の玄治の五人が、ここで荒野対策の作戦会議を開いた。

立原はその様子を思い出していたが、荒野ファンらしい美人の前でそのことは伝えられなかった。

二〇三〇年、七月七日、午後三時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、江ノ電で鵜沼に向かっている。

主人の立原に丁重に礼を云って、喫茶店「帰路」を出ると、蝶子は麗子にランチを奢った。

麗子の希望でトンカツを食べた。

蝶子はいちおう菜食主義だが、このときばかりは麗子につきあうしかなかった。

「勝つ、勝つ、カーツ」

と麗子が騒いで譲らなかったからだ。

トンカツ屋に入って、蝶子ひとりキャベツばかり食べるわけにもいかない。

麗子が云う意味は蝶子には解らなかったが、

(勝ちたい)

と何となく蝶子は思った。

蝶子は覚悟だけはしていた。

荒野を知ることが、もしかすると命を賭ける行為ではないかと。

それがあったので、

(勝ちたい)

となったのかもしれない。

何年かぶりで食べる肉は旨かった。

旨いだけでなく力が湧いてくる感じがした。

ダイエットのために菜食主義になったわけではなく、思想的なものでもない。

五年前にアメリカに留学した際に、ホームステイした家族が菜食主義だったから、自然と蝶子もそうなってしまったのだ。

(これからは肉食主義にしようか)

と考えると、つと笑いがこぼれた。

笑いはなかなか止まらなかった。

麗子はそれを見て、

(重態で超高齢の老人に会えるかもしれないのが、どうしてそんなに嬉しいのだろう)

と思いつつ、スマホで蝶子の横顔の写真を撮った。

蝶子の気持はよく解らなかったが、麗子にとって従姉の存在は大きな興味の対象であり自慢でもあった。

人気女優かトップモデルになれそうな容姿を持っていて、東大を一番で卒業した頭脳。

しかも美貌も賢さもまったく鼻にかけない、というか無関心にすら思える。

その自慢の従姉が、自分を頼りにしてくれるのが、めちゃくちゃ嬉しかった。

もしもそれが蝶子の演技だったにしても、嬉しさはあまり変わらない気がした。

蝶子と一緒にいることが何よりも嬉しいのだから。

麗子は自分のHPやサイトに蝶子の写真ばかり載せている。

それを見た者はみな麗子が蝶子の容姿を持っているとされていて、いまや麗子のファンクラブがネット上にできあがっている。

蝶子はむろんそのことを知らない。

スマホをいじるのは写真を撮るときだけで、あとは食事中でも歩行中でも電車の中でも麗子はノートパソコンに目を凝らしている。

「あんた、さっきから何してんの」

何げなく蝶子が聞くと、麗子は小鼻をうごめかせて、

『巨人荒野』を流し読みしてるのよ。

とくにラストが肝腎かしら。

『死んだる団』よりも最新情報なのに、お蝶さんはまだ目を通していないから。

何をするにも予習よ」

「それは感心、感心」

ちなみに、麗子が流し読みした『巨人荒野』のラストとは、こういうものである。

【無闇に時間だけが経過した。
海水はだいぶ引いていたが、玄治は戻らない。
郷田は貧乏ゆすりをしながら、待つしかなかった。
すると、郷田の額に付けたライトに、人影が入った。
だが、人影は一人だった。
玄治が諦めて戻ってきたのかと思ったが、様子が違った。
人影は郷田の眼の先まで這って来て、そこで倒れた。
全身が海水に漬かったので、郷田は助け起こした。
麻暮か、荒野か。
郷田の勘では、
(半分半分)
だったが、抱き起こした感覚で荒野だと解った。
荒野は半死半生と思われた。
郷田はコードの奥の方にライトを這わせた。
だが、何も見えなかった。
気配もなかった。
(これも天命か)
郷田は思った。

制限時間の一時間が近づいていた。
(これも天命だ)
郷田は、黄金仮面をその場に残し、荒野に鉄仮面を被せると、背負って蓋の裏を叩いた。
金之助がハッチを開け、二人を引張りあげると、再び閉めた。
鉄仮面を確認すると、特製のロープで己の身体に繋げる。
直後、ジェットが噴射した。
同時に郷田は海に飛び込むと、江ノ島に向かって泳ぐ。
コードが潮の流れと共に、沖に向かって、鋭くしかし厳かに流され始めた】

鵜沼駅に近かったし、地図も見ているので、郷田狂介の邸宅はすぐに分かった。
蝶子は麗子と腕を組んで、いささかのためらいもなく門を入れて石畳を十メートルほど歩き、玄関のイヤホンを押した。
「はい。
あたし郷田狂介。
開いているわよ。
どうぞお気軽に入ってちょうだいねえん」

郷田の馴れ馴れしいオカマ言葉に、

「ふん」

と鼻を鳴らして、蝶子は麗子と腕を組んだまま入って行った。

郷田はフロアの奥のデスクの向こうに座っていた。

アロハシャツにサングラスという恰好だった。

「ようこそ、あたしの探偵事務所へ。」

こんな素敵なお嬢様方が依頼人だと解っていたなら、サマースーツでも着ていればよかったわ。

この建物の屋上はプールになっているのよ。

さっきまで泳いでいたんでごめんなさいね」

それは門に取り付けられた防犯カメラで解っていたはずだ、と蝶子は思ったが、そういう余計なことは喋りたくなかった。

しかも蝶子は、交渉を事前に麗子に頼んでいたのだ。

「はじめまして、私は〈鎌倉PC学園〉の優等生美村麗子、こちらは私の従姉で東大大学院の劣等生猪鹿蝶子です」

麗子はユーモア感を発揮したつもりだったが、郷田は蝶子の美貌と名前に気をとられていた。

(あら、オカマも惚れるいい女。

まあ、ヤクザも敬礼するいい名前)

「それで、ご依頼は。

云わなくてもいいわ、当ててみましょうか。

ずばり、ストーカー問題でしょ」

麗子は愛想よく笑って、

「当たらずとも遠からずです。

従姉が、麻暮さんのストーカーになりたいなんて云い出して、困っていたら喫茶店のご主人がここを教えてくれたんですの」

「ああ、立原さんね、お節介ったらありゃしない。

麻暮先生はもっか療養中でね、面会謝絶よ。

立原さんにも口をすっぱくして伝えてるのよん」

「それは聞いていますわ。

でも従姉は東大ではビッグバンと呼ばれてまして、爆発したらだれにも止められませんの。

それに万が一でも、今日は麻暮さんの体調がおよろしいなんてこともあるんじゃないかと思ひまして」

郷田はいささか渋い顔になったが、

「それでは万が一ということで、麻暮先生にお尋ねするだけはしてみようかしらん。

でも、期待しちゃ駄目よん」

「そうしていただければ。

あの、これはつまらないものですけど」

麗子がバッグから取り出したのは、ノートパソコンではなく、〈いちご大福〉の包みで、

(こんなもの用意していた気配はなかったから、これは自分にくれるつもりのものであったのだろう)

と蝶子は推測した。

たしかに麗子は、立原から郷田が甘いものに目がないことを聞いていて、あげる相手を代えたのだった。

郷田は目尻を下げて、

「じゃあいますぐ別館に行ってくるわね。

ここで三分間待つのだぞ」

郷田が行くと、麗子は蝶子に向かって舌を出した。

(やっぱりこの子は頼りになるな)

蝶子は麗子にハグをした。

ちょうど三分後に郷田は戻ってきたが、浮かぬ表情だった。

「麻暮先生ったら、気まぐれなんだからあ。

いままでだれにも会おうとしなかったのに、即OKだとさ。

でも、心の準備があるから三十分後ですって」

麗子と蝶子は思わず顔を見合わせた。

「いちおうお尋ねしますが、心の準備とはどういうものでしょうか」

麗子の問いに、郷田はやはり浮かぬ表情で、

「お化粧品でもするんじゃないのお」

と突慳貪に答えた。

時間が来るまで、麗子は蝶子のために、郷田の武勇伝を聞くことにした。

立原の言葉にあった、

「江ノ島で窮地にあった麻暮さんを命がけで救った」

その状況を話してもらいたかったのだ。

郷田は麗子の頼みに、気軽に応えた。

「そのことはさあ、陽羅とかいう正体の解らない作家に詳しく話したんだけどさあ。

山内参三さんと舟木英介さんの紹介状を持っていたもんだから、正直に話したんだけどさあ。

あたしは読んでないけど、ホームページに『巨人荒野』なんてタイトルの、いいかげんな読み物を連載してるというじゃなあい。

噂では、あたしのことオカマ探偵だなんて書いているそうね。

あたしはね、ホンモノ・オカマじゃなくて、ニセモノ・オカマなのよん。

あたしの依頼人は女性の方が多くでしょ、この偽装は営業成績をあげるオケツ、じゃない、秘訣なのよん。

そんなことよりも、あんた第九章読んだかしら」

「流し読みですけど」

「正解ね。

あんなもの、世のため人のため、まともに読んではいけません。

これも噂だけどさあ、第九章のラストは、あたしが麻暮先生と玄治さんをおきざりにして、荒野大三郎に鉄仮面をかぶせて、要するに偽装させて救い出したなんて書かれているんですって。

そいで、(これも天命だ) なんて思うって、まあインチキもいいところ。

ノンフィクションなら、あたしの言い分をきちんと正直にありのままに書いてくれないと。

いくら偽装得意のあたしでも、穏健篤実のあたしでも、許してはおけないわ」

郷田は鼻の穴をふくらませた。

「訴えているんですの」

「それって訴訟って意味かしら。

貧乏作家を訴えたって一文にもならないわ」

「でも身の潔白にはなるでしょう」

「け、け、潔白ですって。

あんたもあたしのこと、疑っているみたいな言い方ねえ」

「そんなつもりではございません」

「じゃあ、どんなつもりよ。

あたしはね、麻暮先生を救いたい一心で行動して、見事それを達成したの。

あなたがたも、これから麻暮先生に会えば解るわ。

貴族探偵の快挙と、貧乏作家の愚挙がさ」

「はい、おそらく、いえ、まちがいなく」

「なら、いいけどさあ、でも、いい作家じゃないわ。

あんた方の唯一偉いところは、貧乏作家のところへ行かずに、貴族探偵のところに来たことね。

尤も噂によると、貧乏作家のいるところは遠いし、放射能はあるし偏屈で変態だもんね」

蝶子は郷田の弁説を聞いていて、意地を張りすぎていると感じた。

(やましいことがある者ほど、意地を張る)

二〇三〇年、七月七日、午後四時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、郷田邸の別館の前にいる。

本館よりもはるかに新しく、建てたばかりであることが解った。

しかも豪勢な本館に較べ、ずいぶんと貧相な急造りの小屋であった。

蝶子は麗子に、
「こんどは私が話すからね」
と念押しをした。

(できれば麗子の口調を真似して)

「いよいよね、麗子は関係ないけど、胸が高鳴るわ」
麗子はそう云うと、蝶子の後ろにまわって背中を押した。
蝶子は慎重に扉を押した。

麻暮正作は、いや荒野大三郎と云うべきだろう。

ここでは〈鉄仮面〉という呼び方にする。

鉄仮面は、窓が一つもない薄暗い小部屋のなかで、籐椅子に座っていた。
小柄な身体に黒いドレスを纏い、両手はやはり黒い手袋をしていた。
その両手は小刻みに震えている。

生身の部分は、髪の毛一本すら見せてはいない。

鉄仮面の奥の、窪んだ鈍色の両眼が、油断なくこちらを窺っている。
その異様な雰囲気、さすがの蝶子も立ち尽くしたほどだった。

それ以上に戸惑ったのは、部屋の異常な臭いだ。

(これは死臭だ)

蝶子は呼吸を止めたくなくなったが、こちらが頼んで訪問したので、我慢するしかなかった。

麗子の方は無遠慮に、ハンカチで鼻と口を押さえている。

「ケケケ。

お嬢さん方、よく来てくれましたね。

こんな日がボクに来るなんて。

夢にも思いませんでしたよ。

七夕のご利益かもしれませんね。

ケケッケケ」

声色を使って麻暮に似させているが、金助なら一発で見破るだろう。

鉄仮面にすすめられて、蝶子と麗子は貧しいソファに並んで座った。

風が臀部から這い登ってくる感じがしたが、我慢するしかなかった。

「私は猪鹿蝶子、こちらは従姉の美村麗子といます。

早速ですが、取材させてもらってもよろしいですか」

蝶子はあえて感情を殺した声で聞いた。

「何なりと。

でもボクも年ですから、昔のことは憶えていますかどうか」

「いえ、最近のことですわ。

陽羅義光という人の『巨人荒野』によりますと、あなたは麻暮正作さんではなく、本当は荒野大三郎さんのことですが」

「陽羅、義光。

憶えていますよ」

(鉄仮面は話を逸らす気だ)

と蝶子は思ったが、

「無名の作家を、ごぞんじなのですか」

と聞きつつ、自然のなりゆきにまかせることにした。

鉄仮面は言葉を運びながら、勿体ぶった調子で喋り始めた。

「老齢の作家として、知っているわけではありません。

ケケケ。

生きている人間とは思えないほど青白く痩せ細って、この世界のだれよりも神経質そうな、いかにも極貧大学生といった感じの、ひとりの青年として知っているのです。

もうかれこれ半世紀、いえそれ以上かもしれません。

これはボクが。

ボクの耳が、荒野大三郎から直接聞いた話ですがね。

全学連と全共闘の闘士だった辻中亀夫が、〈死んだる団〉への入団希望者だということで、早稲田大学の友人を連れてきたんですね。

お嬢さん方には全学連とか全共闘と云っても解らないでしょうから、簡単に解説しますとね、主に反体制の大学生の政治活動グループですかね。

もっとも、その陽羅という青年は、自称ノンポリだそうです。

ノンポリ、つまり無関心派。

ところが無関心どころか、荒野について、また〈死んだる団〉について、根掘り葉掘り聞いてきたそうです。

しかも陽羅は当時、満身創痕の身体でして。

肺と胃と肛門と、三箇所から大量の出血をしながら聞いてきたというのですから、さすがの百戦錬磨の荒野も戸惑ったとのことでした。

どんな質問でどんな解答だったかの詳細は、ボクは、いえ荒野が憶えていないと云うんですが。

そのとき荒野はリベラルという言葉を使ったと云うんです。

リベラル。

要するに、〈死んだる団〉は、自由意志で集まった人たちなんだという風に。

すると陽羅は、皮肉な笑みを浮かべて、この世界に自由なんてものは存在しない、人間は本質的に桎梏（しっこく）の存在だと云うのです。

その桎梏から解放されるために、若者は宗教や政治に走ったり〈死んだる団〉に入団したりするが。

それは幻想に過ぎない、と断言したそうです。

自分は解放を求めず、桎梏に耐えることが生き甲斐だとすら、付言したそうです。

荒野はそれについては、返答しなかったそうです。

荒野が、感覚的に解ったことは、陽羅は稀代の嘘つきで、いずれ遠からずフィクションを書くだろうと。

ええ、ノンフィクションではなく、フィクションをです。
じっさいその後、陽羅が書いたのは、『道元』『西郷』『子規』『啄木』『太宰』などの作品です。

これらを、フィクション抜きで書けるわけがないじゃないですか。
『巨人荒野』も同質の作品です。

作品そのものの質はさておいてね。

ケッケケ」

(なるほど、まわりくどい話だったが、鉄仮面はそれが質問に対する答だと云いたいのだ)

「解りました。

それはそういうことで、了解しましたわ」

蝶子は了解をしていなかったが、そう云った。

「ケケケ。

本当に了解してくれたんですか。

それならば。

ボク麻暮正作は、安心して対応できますね」

鉄仮面の奥の両眼が鈍く光った。

(あの光は何だろう)

と考えつつ、蝶子は次の質問に入った。

「〈死んだる団〉は、血腥い結果を残して、終焉しました。

荒野さん自身も、〈死んだる団〉に命を狙われたそうです。

麻暮さんとしての、〈死んだる団〉の総括を、お聞かせ願えませんか。

できれば、荒野さんはどう考えているのかも。

解っている範囲でお聞きしたいのですが」

鉄仮面は深い溜息をついた。

その溜息は小さな部屋のなかで響いた。

鉄仮面は重そうに口を開いた。

「総括ですか。

お嬢さんも答えにくい質問をしますね。

ボクは、もしボク麻暮がいなかったら、と考えますね。

いても、臆病だったり意気地がなかったり。

その場合、荒野は〈未来計画カンパニー〉など作らずに、まだ江ノ島の秘龍窟で〈自殺請負所〉を仕切っていたでしょうね。

だが、命知らずのボクが大活躍をしましたからねえ。

ケケケ。

荒野だって、一探偵に、まさかここまでやられるとは、思ってもみななかったでしょうよ。

ただ。

荒野が生きているなら、〈死んだる団〉の総括も有り得ません。

ボクに云えるのは、それだけです」

「どうして。」

麻暮さんは、命知らずなのかしら」

蝶子の興味の対象は、すでに荒野ひとりだけではなかった。

荒野と麻暮、この関係性こそが、荒野が起こした事件の総ての、鍵を握っているのではないかと考え始めていた。

「ボクが命知らずなのは、死に対する恐怖がまったくないからです。

荒野も命知らずですが、死に対する途方もない恐怖のために、却って命知らずなのです」

「麻暮さんが死を怖れないのは、どうしてなのかしら」

「その答は簡単です。

ボクは、誇れる種類の才能がないからです」

「山内さんの『死んだる団』。

あれを読むかぎりでは、お世辞ではなく、麻暮さんの才能は凄い思われますが」

「ケケッケ。

あるのは、探偵として獲物を追い詰める才能くらいですよ。

たまたまその獲物が、悪人ならいいですけど、善人だとしたらどうでしょう。

その場合、ぼくの才能はストーカーと変わりません。

ボクは舟木英介君や郷田狂介君のような、まっとうな探偵ではないのですよ」

「でも、悪人とか善人とか。

人間は分別できるものではないかもしれないわ」

「その話は長くなるというか、哲学的な話になってしまうので。

おそらく具体性にも欠けるでしょう。

お嬢さんは、具体的な話を聞きたいんでしょうから」

「それはそうですわ」

「なら、話を続けましょう。

反面、荒野にはかつて有り余るほどの、誇れる才能がありました。

ごぞんじでしょうが、荒野は政界の〈ドン〉である松本玄信、美術界の巨匠である北山極斎、〈愛信会〉の教祖の日下典禪と同一人物です。

あの稀有な才能が、荒野を死の恐怖に駆り立てるのです」

「質問があります。

どうして、かつて、なのかしら」

「ケッケケ。

ボクのせいで、それらの才能は枯れてしまったのですよ」

「それでは。

現在は死の恐怖から解放されたと」

「それが、荒野は枯木にだって花を咲かせる奴ですからねえ」

「もうひとつの質問ですが。

私は稀有な才能は、達成されれば、死の恐怖なんか感じないと思うのですが。

なぜって。

歴史に残るということは、死の恐怖を薄めさせるのではないかと」

「その質問。

それは、直接荒野にしてほしいものですね。

ただボクの口から云えるのは、死んだら何もない。

天国も地獄も何もない。

死んだ人間は、地球のもしくは宇宙の塵に過ぎません。

それに、すくなくとも芸術家にとって、達成なんてことがあるんですかねえ」

「では質問をもうひとつ。

荒野さんは、熱狂的な信者を多く持つ、新興宗教の教祖だったのですから、悟り、といったものはなかったのかしら」

「悟れないから、宗教に依存するのです。

それは教祖だって、同じことなんですよ」

「そういうものでしょうかしら」

「そういうものです。

キリストが十字架に打ち付けられて、最後に叫んだ言葉をごぞんじでしょう」

「まあ、あれは、解釈もいろいろでしょうが」

「キリストだって、荒野と同じです。

強靱な信念はあっても、確固たる悟りはない」

鉄仮面は語調を強くして云った。

蝶子は他人と話をしている、気圧されたのは初めてだった。

「質問の方向を変えます。

麻暮さんは現在、どういう生活を送っていらっしゃるの」

鉄仮面の手の震えが烈しくなった。

「ケケケ。

見た通りの生活ですよ。

ここに一日中座って、郷田君が運んでくる軽い食事をいただく。

ここにはテレビもパソコンもないですから、あとは瞑想をするのみです」

「退屈はしないのかしら」

「お嬢さんはお若いから。

おそらくボクの立場に立って考えてみられないのでしょうかね。

いまは肉体が。

そう精神も。

復活を目指して蠢いているところです。

その復活の蠢きを、それこそ一秒一秒感じるのは、退屈どころか、至上の悦びなのです」

「瞑想とおっしゃいましたが、荒野さんのことを想うことがありますかしら」

「ボクの瞑想は、まだ迷走という段階ですから、想いたくなくとも想ってしまいますね」

「それは。

たとえば」

「たとえば、荒野はボクの義弟ですが、ずっと前からいつも実弟という気がしていました。

だから、ボクが荒野を想うのは、世間の兄が世間の弟を想うこととほとんど変わりません」

「つまり、連枝の情」

「情は情でも、愛情でも温情でもありませんよ。

近親憎悪の情というのが近いでしょう。

ケッケ。

世間だって同じですよ」

「そうかしら」

「お嬢さんは、兄弟姉妹がいませんね」

「でも周りを見ても」

「失礼ですが、想像力の欠如というものではありませんかね。

おや、ご不満の表情ですね。

ケッケ。

お嬢さんは、そういうことを云われたことがなさそうですね。

あるいは、そういうことを云う人が周りにいないのですね」

(当たっているから憎らしい)

蝶子は、花よ蝶よと育てられ、蝶が蜜に群がるごとく男たちが寄ってくる。

批判や非難どころか、お世辞たらたらで。

蝶子はそんな状況に気づいてはいた。

けれども、

「想像力の欠如」

なんてことは云われたくはなかった。

しかも、初めて対面した人物に。

蝶子は意識なく沈黙に陥った。

鉄仮面は沈黙に耐えたが、麗子が沈黙に耐えられずに、口を開く。

「野次馬的意見でいいかしら」

「野次馬。

野次馬こそ、人間の本性です」

鉄仮面は麗子を凝視した。

麗子はいささか引いたが、わざと声に力をこめて、

「もしかして、荒野さんって、自分の能力ひとつで、この世界を変えられると考えてらっしゃるのでは。

かたや麻暮さんも、自分の能力ひとつで、この世界が荒野さんによって変えられるのを、防ごうとしているのじゃないかしら」

蝶子は、何となく自分が感じていて、うまい言葉にできないでいたことを、麗子が思いきり口にしたことに驚いた。

それはすなわち、いままで性格が可愛かっただけの従姉が、いつのまにか成長していることに驚いたのだ。鉄仮面の反応は遅かった。

何かを考える風に、何かに耐える風に、下を向いていた。

初めて見せるその態度に、蝶子と麗子は息をひそめて見守った。

つと顔をあげたときは、いままで通りの鉄仮面に戻っていたのだが。

「ケケケ。

なかなか手ごわいご意見ですな。

当たっているから憎らしい。

と言いたいところですが、まったくの見当はずれですよ。

ボクの世界も荒野の世界も、もしもこれが小説の世界なら、世界文学の大河小説ではなく、日本文学の私小説といったところでしょう。

それともうひとつ。

お嬢さんの口ぶりですと、ボクも荒野も、自分の能力を過信していると。

もし本当にそうなら。

ボクはこれほど荒野に翻弄され、荒野はこれほどボクに翻弄される、ということ
はなかったでしょう」

「解りましたわ。

野次馬的意見ですので、ご容赦ください」

麗子は、素直にそう言った。

蝶子は、素直になれなかった。

「こんどは私から、野次馬的意見を。

麻暮さんも荒野さんも、本を読むかぎりでは、もう百歳前後のはずですわね。

この闘いをいつまで続けるつもりでしょうか」

鉄仮面はまた下を向いた。

蝶子と麗子はまた、息をひそめて見守るしかなかった。

鉄仮面が顔をあげた。

「ボクはこうして生きている。

荒野は生きているかどうか不明です。

もしも荒野が生きていたなら、まちがいなく闘いは続きます」

「いま荒野さんが、生きているとお思いですの」

「ボクが生きているのだから、きっと荒野も生きているはず。

ボクは荒野が生きていることを望んでいませんが、死んでいることも望んではい
ません」

「何か複雑ですわね」

「複雑ですって。

ケケケッ。

複雑怪奇の反対語は何でしょう。

そう、単純明快ですよ。

世界文学の大河小説は複雑怪奇でしょうが、日本文学の私小説は単純明快ですよ」
「いえいえ。

関係は単純明快でも。

そうおっしゃる麻暮さんの、心のなかが複雑怪奇だと云いたいんですわ」

「心、心と云いましたよね。

お嬢さんにかぎりません。

みんな、心、心と云う。

人間に本当に心なんかあるのでしょうか。

尤もボクも荒野も人造人間ですから、人間の心があったにしても半分だけでしょうがね。

あ、そうですね。

心ではなく、頭と云えばいいんだと。

しかしボクたちは本当に、頭で行動しているのでしょうか。

お嬢さんにも、こういう経験がありませんか。

具体的に云うなら、頭ではこの部屋からさっさと逃げ出したいと。

それでも頭の意志に逆らう、何かがあるのだと」

「それは、ありますわ」

と麗子が口を挟んだ。

「頭ではいつも、お蝶さんを完全に尊敬しているつもりなんですけど、なぜだか尊敬しているとは思われない態度に出してしまうの」

「ケケケ。

ほう、完全という言葉を使いましたね。

心でも頭でもいいけれど、完全じゃない。

完全じゃないものを尊重して、心が大事、頭が大事と云えますかね」

「従姉は素直ですから、麻暮さんの思う壺になってしまいますね。

それではもうひとつ、野次馬的質問を」

「人間って、馬でもないのに、どうしてこうもみんな野次馬なんですかね。

自分のことだって、野次馬的に見てしまうことすらあるんですから。

いまボクは荒野に就いて、いろいろ云いましたが、もしもボクが麻暮ではなく、荒野だったにしても、自分のことを野次馬的に見てしまうのですよ」

「私も麻暮さんに質問をしながら、荒野さんに質問をしている気分になることがあります。

その荒野さんなんですけど。

とてつもない資産家だとのこと。

その資産を、慈善事業とかに使おうとしようとしたことは、まったくなかったのかしら」

「それは、ボクも荒野に聞いてみたいですね。

ボクならホイホイ寄付しますがね。

だが荒野は疑り深いから、寄付した先がその金をどう使うか。

なにせ他人を信用しない人間ですから。

おっと、もしかすると。

荒野は、〈死んだる団〉も〈自殺請負所〉も〈未来計画カンパニー〉も、荒野なりの慈善事業と考えているかもしれませんよ。

ケッケ」

「ああ、そうですわ。

思想次第では、あれらは慈善事業になるかも。

麻暮さん、さすがは世界一の探偵さん。

読みが鋭いですね」

蝶子はわざと極端なお世辞を使ってみた。

鉄仮面の様子を窺うと、ちっともお世辞に反応していないことが確認された。

(やはり、陽羅義光が書いた通り、この鉄仮面は、荒野大三郎なのか。

それにしても)

「それにしても、麻暮さんは荒野さんのことを、客観的に冷静に、よく観察なさっていますね」

「観察、観察ですか。

ケケケ。

荒野のことは、観察する必要がありません。

身をもって接していると、感覚的に解ってしまうところがあります」

「麻暮さんご自身のことも、感覚的に解ってらっしゃる」

「さて、どうでしょうか。

ボクは荒野ほど、あれこれ画策してあれこれ活動しているわけではありません。

探偵稼業一筋、そのなかでも荒野対応が中心ですから、感覚的には一発で解るところがありますね」

「人間理解は感覚かしら」

「ボクはお嬢さんに対しても、理屈っぽいことを述べたかもしれませんが、あくまでも感覚に基づいた理屈です。

人間を語るのに、理屈は通用しない、理屈では語れない。

それでも、テレビでは理屈好きの文化人が轟めいていますよね。

だからボクはテレビをめったに観ません。

そこで人間理解をしても、それは理解したつもりだけの話で、つमりの人生を歩んでいる者だけが納得する世界です。

おっと、これも理屈っぽいですねえ。

ケケケ」

云ったあと、鉄仮面は噓せた。

二度三度、それで終わるかと思ったが、烈しく噓せ始めた。

麗子が蝶子に目配せをして、郷田を呼びに行った。

郷田が慌てて入ってきたとき、鉄仮面はちいさく噎せていたが、だいぶ落ち着いてはいた。

それでも憔悴の色ありありで、郷田が、
「麻暮先生の体力が、まだ回復していませんから、取材はもうこのへんでいいかしら」

と、やや冷徹な声で云った。

「気を使わずにすみませんでした」

と麗子は謝ったが、蝶子は、

(これは鉄仮面の演技だ)

と思った。

「では失礼しますが、体調のよろしいときに、またお伺いしてもよろしいでしょうか」

蝶子が聞くと、鉄仮面は掠れた声で、

「ボクは何事も、拒んだりはしませんよ。

尤も、ボクが生きていればの話ですがね」

丁重に頭を下げて、蝶子と麗子は別館を出た。

郷田は、鉄仮面に薬を飲ませるという理由で、出てこなかった。

「無理をさせちゃったかしら」

と麗子が云うと、蝶子は苦笑しながら、

「バレそうになった、と気づいたんだね。

感覚の鋭い人に、まちがいはないよ」

「へえ、そうなのね」

「それは、きっと、そうなんだよ」

「麻暮さんじゃないのかしら」

「かしら、どころか。

あの鉄仮面は荒野さんよ」

蝶子は断言して、空を見上げた。

雨が落ちてきそうな雲行きだった。

まだ梅雨は明けていない。

二〇三〇年、七月七日、午後五時。

郷田狂介は、鉄仮面に特製のジュースを飲ませている。

土鍋ほどもある大きな器を両手で持って、その端から少しずつ鉄仮面が飲むのを見守っている。

「もうそろそろ復活よ、大人（たいじん）」

「その言い方はやめてくれませんかね、郷田さん」

「でも、あれよ。

麻暮さんとも云えないし、荒野さんとも云えないし。

いわんや、鉄仮面でもねえ」

鉄仮面は苦笑して、

「それもそうですね。

すまないねえ、面倒をかけて」

「とにかく大人に、元気になってもらわないとさあ。

このジュースには、蝮、スッポン、朝鮮人参、ウコンなどが入っているから、もうピンピンよ」

「ピンピンはいいですねえ」

「あのふたりの乙女はいかが。

ピンピンかしら」

鉄仮面は一呼吸してから、

「いやはや、若い人に久し振りで会うので、緊張しましたね。

猪鹿蝶子という人は、美人ですが、なかなか辛辣で、興味深くは思われましたね。

おつきあいはしたくないタイプですが。

美村麗子という人は、美人ではありませんし、興味深くもありませんが、おつきあいでするならこちらでしょうか」

「さすがは大人ね。

見る目あるわあ。

あたしも、あの猪鹿蝶は苦手よ」

「だが、あの子は必ずまた来ますね。

簡単には引き下がらない眼をしていました。

早く回復して、ここを脱出しないとイケません」

「あら、脱出だなんて。

あたしはまだ、大人に指導を戴いていないのよ。

猪鹿蝶より、あたしのが先約なんだからさ」

鉄仮面は静かに低頭して、

「郷田さんは命の恩人です。

命の恩人とは、何処にいても永遠のおつきあいです」

「くくく。

大人たら、嬉しいこと云ってくれるじゃあない。

この人たらし」

郷田は手の甲で涙を拭いた。

大量のジュースをすっかり飲み終えてから、おもむろに鉄仮面はこう云った。

「いまさらながら、ですがね。

郷田さんはどうして、私を救ってくれたのでしょうか」

郷田は微妙な笑顔になって、
「たしかにいまさらながら、ね。
あのときのことは正直、よく憶えていないのよ。
けれどもあたしは昔から、ヒーローに憧れていたところはあったの。
麻暮先生は、探偵になったときからの、高い目標であり、永遠のヒーローなの。
その麻暮先生と触れあって、これはとても適わない、決して届かない目標だと自覚したわ。

その届かないという部分ね。

それがたぶん、麻暮先生のブラック・ヒーロー性なの。

そう考えているあたしの中で、もうひとりのブラック・ヒーロー荒野大人が、どういうわけか麻暮先生とオーバーラップしていたのね。

だからあたしにとっては、麻暮先生を救うことと、荒野大人を救うことは、同次元のこととして在ったと思うのね。

ヒーローになれないあたしが、余計になれないブラック・ヒーローに憧れてしまっていたの。

正確にはまだ云えないのだけど、いまはそう考えているのだけれど」

喋り終えた郷田はいささか興奮して、顔が紅潮していた。

鉄仮面は静かに微笑して、

「郷田さんは、立派にヒーローですよ」

「お世辞はやめて、大人。

あたしはお調子者だから、本気にしちゃうわよ」

鉄仮面は厳かな声で、

「本気にしてもらって結構です。

私はお世辞など云う人間ではありません。

おっと、私がまともな人間だとしてのことですが。

郷田さんはヒーローだ。

大勢の中でだれかがそう口走っても、反対する者は決して一人もいないでしょう」

「まいった、まいったわ。

退散、退散」

郷田は益々赤くなって、別館を飛び出した。

本館に戻った郷田は、

「莫迦ね。

あたしやっぱり、大人に惚れているわ」

とつぶやいた。

二〇三〇年、七月八日、午後一時。

猪鹿蝶子と美村麗子は、喫茶店「帰路」で声高に対話している。
他にも客がいるので、いつ注意しようか、主人の立原正男は思案している。
しかし、注意してもお願いをしても、このふたりには無理だろうということも解っている。
それに、その会話は、立原自身も聞きたい内容であったのだ。

「それで、お蝶さんは、まだ荒野さんのこと調べるつもりなのね」
麗子は詰問風である。
「むろん、もちろん、ろんよりしょうこ」
蝶子の目の下は、歴然と黒い隈。
それがどぎつい化粧さながら、蝶子の美貌を妖艶にしている。
蝶子は昨夜、麗子の部屋に泊まり、麗子のノートパソコンの画面で、陽羅義光の『巨人荒野』を読み続けていたのだ。
麗子にプリントさせるのはしのびなかったのですが、それでもこんなに長いとは思わなかった。
山内参三の『死んだる団』よりずっと長い。
もしかすると、前半は『死んだる団』の内容が一部入りこんでいるのにちがいない。
文体はちがうが、蝶子がすでに知っていることが出てきたのだ。
蝶子は全作家のホームページに、前半の〈あらすじ〉があるのに気づいていなかった。

【巨人荒野あらすじ 陽羅 義光

一九七〇年。

通称【死んだる団】が、世間を騒がせていた。
【死んだる団】の主な構成員は、以下の通り。
●過激な反体制主義者の、高杉京平。
●元全共闘闘士の、辻中亀夫。
●爆弾マニアの、藤上吾郎。
●『暗殺論』の思想家・朝山完吉の息子の、京大生・朝山善吉。
●大物政治家・松本玄信の息子の、東大生・松本大海。
●清水印刷の社長、清水清。
●それに紅一点、立花雪絵である。

●私立探偵・舟木英介は、●売れっ子ライターの山内参三から、【死んだる団】の調査を依頼される。

舟木英介は、●恋人の川上真希を拉致した犯人が、【死んだる団】の辻中亀夫であると推察していた。

山内参三は別口で、●伝説的私立探偵・麻暮正作にも【死んだる団】の調査を依頼する。

なお、山内参三は、たまたま●立花雪絵を匿うことになる。

●麻布署の刑事花井勇太と●寒崎武士警部に雪絵は追いつめられるが、山内は●後輩の新川次郎弁護士の助けを借りて、雪絵を助け結婚することになる。

麻暮正作は、【死んだる団】の黒幕を、●旧敵荒野大三郎だと踏んでいた。

麻暮と舟木は、各々独自に調査を開始するが、舟木は朝山完吉の地元京都へ向かい、麻暮は秩父の新興宗教〈愛信会〉のメッカに侵入する。

ほぼ同じ頃、●新宿署の敏腕刑事・山風順一は、追っていた藤上吾郎の口から【死んだる団】の存在を知る。

やはり京都へ向かった山風は、そこで〈朝山完吉殺人事件〉に遭遇する。

山風は、●相棒の（花井勇太の弟）花井健太や●手下の小林勘助（●麻暮の手下である小林金助の弟）の力を借りて、真相究明に尽力するけれども、志なかばで帰らぬ人となる。

なお、山風順一の一周忌が済んだあと、花井健太は山風の一人娘と結婚、希望して入り婿という形をとり、山風健太となった。

それまで朝山完吉としばし共に居た舟木は、●政界の〈ドン〉と呼ばれる松本玄信のボディガードを、再度やることになるが、松本が、●芸術界の巨匠・北山極齋と同一人物であることに気づく。

さらに、辻中亀夫の自死によって、●〈愛信会〉の教祖・日下典禪とも、同一人物であることを知る。

●〈日刊スクープ〉名古屋支局のスター記者・小金井豊は、大臣を刺して飛驒山中に逃げ込んだ、高杉京平との単独会見に成功、●編集局長の山本久治にハッパをかけられながら、【死んだる団】の本質に迫る。

一方、朝山善吉の日記を盗ませた麻暮正作と、山風順一から示唆を受けた、相棒刑事・花井健太は、江の島《秘龍窟》に潜入する。

●長谷在住の流行作家、東剣市から紹介された、●郷土史家の内田晴彦から、麻暮は《秘龍窟》の存在を教えてもらったのである。

花井健太は、《秘龍窟》で【自殺請負所】＝通称【D】なるものを発見する。

また、【死んだる団】と【自殺請負所】の繋がりを知る。

かたや麻暮正作は、●荒野の片腕、川上宙衛門所長を倒し、荒野大三郎と決闘の末、共に海中に没する。

荒野大三郎こそ、松本玄信であり、北山極齋であり、日下典禪であった。

物語は、ここで終わるのではない。

半世紀経った。

二〇二〇年に話は突入。

花井勇太と山風健太の、元刑事の兄弟が、すでに老齢になっている山内参三と舟木英介を訪ねる。

荒野大三郎が活着ているのではないかと考え、相談に行ったのである。

同じ頃、麻暮正作は、手下の小林金助と鎌倉でひっそりと暮らしている。

麻暮は運良く助けられたものの、鉄仮面を付けている。

元刑事兄弟も麻暮たちも、ともに、鎌倉山の洋館が臭いとにらむ。

麻暮と山風は、かつて「秘龍窟」にともに潜入した体験から、今回もともに潜入することとする。

荒野の片腕として、執事風なことをやっている●松本玄信の元秘書木下弁太郎は、金助に殺される。

麻暮と山風が見たものは、巨大な水槽のなかの「オバケクラゲ」とでも言いたい物体で、それこそが、荒野大三郎の正体であった。

麻暮は、装備された車椅子を発進させて、「オバケクラゲ」を木っ端微塵に破壊し、自らも雲散霧消する。

以上が第四章までのあらすじであるが、ここまではまだ全容の三分の一にも充たない。

おそらく。

というのは、これは私個人の頭のなかで創りあげたものではなく、基本はあくまでもノンフィクションであるのだから。

よってさらに物語は、二〇三〇年へと継続するのである。

継続というよりも、『巨人荒野』の本番はこれからであり、いままではその前章にすぎない。

新しい「重要人物」としては、●オカマの私立探偵、郷田狂介、金助の実子●元大泥棒の竹田金之助、麻暮の新しい片腕である殺人鬼の●玄治、介護ロボットの●タナカ、自称「朝山完吉の生まれ変わり」●闇猫などが登場する。

更にこれからまた、新しい「最重要人物」の登場が約束されているのである】

これに気づいて読んでいれば、本編は、二〇三〇年から読めばよかった。

ともかく蝶子は、一晚眠らずに、この日の午前中になってようやく読み終えたのだった。

朝昼兼用の軽食をとるために、麗子とともに「帰路」に来たのだったが、昨日の鉄仮面との対話の感想から、つい声高な応酬になってしまっていた。

「やっぱり鉄仮面は、麻暮さんではなく、荒野さんかしら」

「そうだね。」

まわりくどかったけれど、鉄仮面は、荒野さんの言葉として、陽羅は稀代の嘘つきで、いずれ遠からずフィクションを書くだろうと。

そう云っていたけれど、私は会っていないから、陽羅という人が稀代の嘘つきかどうかは解らない。

そして『巨人荒野』は、たしかにフィクションの部分もあると感じたけれど、あのラストはノンフィクションだよ」

「麗子もそう思う。」

「ただ鉄仮面は、まちがいなくこれ以上近づいてはいけない人物よ」

「解っているんだ。」

「でもさ、そういう人以外に興味もてるかな」

「そういうところが、お蝶さんの危険なところね。」

「お願いだから、もう荒野さんからは手を引いてよ」

「あんたのお願い、聞かないことなかったけれど、こればかりは」

「お蝶さんに何の得があるというの。」

「他にやるべきことはないの」

「私もさ、そう思ってみたださ。」

「この他にやるべきことなんかないんだ」

麗子は頭を抱え、

「ああ、この若さで大切な従姉を失うのね。」

「可哀想な麗子」

「あんた、そんなことより、ドローン貸して」

麗子は頭を上げ、

「どうして知っているの。」

「麗子がドローン持ってるの」

「あんたのことなら何でも知っているんだよ。」

「だからあんたが好きなんだ」

「もしかして」

「そうだよ。」

「郷田さんはもう、私たちが鉄仮面に会わせてくれないだろう。」

「でも私の勘では、鉄仮面は近く動き出す。」

「鉄仮面の行先をドローンで追跡するんだ」

「まあいいか。」

「お蝶さんが、鉄仮面に近づかない手は、これだけかもしれないわ。」

これからまた家に戻りましょう。
ドローンの操作を教えるわね」
「やっぱり頼りになる従妹じゃわい」
「でも、ドローンはいま、法的な締め付けが厳しいから、何かあったら罰金はよろしく」
「それは持ち主のあんたの役目。
セレブなんだから」
「ふん」
麗子は蝶子の真似をして、鼻を鳴らした。
「問題は」
云ってから蝶子は口を噤んだ。
(私たちも、ドローンに見張られているかもしれないってこと。
そのドローン进行操作しているのは、郷田狂介か、もしかすると陽羅義光かもしれない。
『巨人荒野』には、続きがあるのだから)

二〇三〇年、七月八日、午後三時。

立原正男は、小林金助、竹田金之助の父子を待っている。
蝶子と麗子が帰った後で、立原はふたりに連絡を入れたのだ。
そろそろかと思ひ立原が外の路に出ると、向こうから車椅子の金助と長身の金之助がやってくるのが見えた。
金助が手をあげたので、立原も手をあげた。

「メールによると、麻暮先生のところに若い女性がふたり、訪ねて行ったようですね」
アイスコーヒーに口をつけずに、金之助が開口一番聞いた。
「それはまちがいありません。
ふたりがここで、話しているのを聞きましたから。
じつは、郷田邸の別館に、麻暮先生がいるのを教えたのは私ですが。
まさか郷田さんが、面会謝絶のはずの麻暮先生に、会わせるとは思いませんでしたよ」
「そうですか。
すると、麻暮先生はもう回復されたんでしょうね」
「ところが、ふたりの話によると。
あそこに居るのは、麻暮先生ではなく、麻暮先生を装った荒野大三郎だと云うんですよ」

この言葉に、金助が鋭く反応した。

「あ、あ、荒野だって。

そ、その話は本当でやんすか」

「たしかに私はそう聞きました」

「となると、つ、つまり、江ノ島で行方不明になったのは、荒野ではなく麻暮の
だんな。

そ、そのこと、郷田さんは知っているのかね」

立原はいささか気圧されたが、

「それは郷田さんに聞いてみませんと。

ただ私の勘では、郷田さんは、荒野と知っていて助けたのではないかと」

「ま、まさか。

もしそうなら、裏切者だ。

もしそうなら、麻暮のだんなは、玄治さんとともに、海中深く没したのでやんす
か」

慌てて金之助が口を挟む。

「親父さん、そう興奮すると血圧が上がる。

自分たちは、玄治さんが命を賭して、荒野を海中に沈めたと信じてきました。

そして納得し、玄治さんの自己犠牲を賞讃しました。

だが、鉄仮面が麻暮先生ではなく荒野だとなると、大いに話がちがってきますね。

それでも親父さん。

まだそうと決まったわけではないので、明日にでも自分が行ってたしかめてきま
す」

金助は呼吸を整えてから、

「頼んだぞ、金之助よ。

荒野大三郎退治のために、麻暮正作先生と不肖小林金助が、長年どれほど苦勞を
したか。

郷田狂介さんは、まったく知らんのだ」

怒りが両眼に籠っている。

見ながら、金之助は、

「たしかに。

もしその情報が真実なら、自分が親父さんの元に、荒野と郷田のふたつの首を届
けましょう」

(いやはや、物騒なことになったもんだ)

と立原は苦渋の面持ちだった。

(万一大事件にでもなったら、若い女性たちに、麻暮先生の居所を教えてしまった
のが、まちがいのもとなる)

立原は意を決し、

「私も行きます。

いえ、前もって郷田さんに、私から連絡を入れます。

依頼したいことがあるので、明日お伺いしますと。
私からならば、郷田さんも怪しまないはずです」
「たしかに、自分がひとりで行っても、居留守を使われそうですね」
金之助が賛同し、金助も頷いた。

二〇三〇年、七月九日、午後一時。

立原正男と竹田金之助は、郷田狂介邸の門前に立っている。
電話で約束した時間だ。
「依頼したいことがあります」
と伝えると、郷田は気安く請負ったので、立原がこの時間を設定した。
防犯（監視）カメラに映らないよう、金之助は立原の後ろで長身を屈めていた。

ふたりは、門を入れて石畳を十メートルほど歩き、玄関のイヤホンを押した。
「はい。
立原さんでしょ。
開いているわよ。
どうぞお気軽に入ってちょうだいねえん」
郷田の馴れ馴れしいオカマ言葉に、ふたりは中に入って行った。
郷田は金之助の姿を確認すると、渋面を作った。
「やーねえ。
もしかして依頼は口実で、用があるのは金之助さんかしら」
「すみません。
騙すつもりはなかったんですが。
ああでも言わないと、拒絶されると思って」
立原は頭を下げたが、郷田は表情を一変させて、
「つもりはなくても、結果的に騙された、あたしがいけないのよ。
金之助さんは同志なんだから、遠慮は要らないわ」
「でも麻暮先生に、自分たちは会わせてもらえないんでしょう」
金之助が言うと、郷田は胸を反らせて、
「麻暮先生を守るのが、あたしの役目だもんね。
本当に人事不肖というか、危篤というか、危険な状態だったのよ」
「それでいまは」
「いまは、ピンピンとは言えないけど、奇跡的に回復したわ」
「それなら、会わせてもらえるんですね」
「それがさあ。
ついさっき別館にスープを運んだときには、麻暮先生の姿がなかったのよ」

「なかった。
ということは、散歩か何か」
「〈お世話になりました／ご恩は忘れません〉という置き手紙があったからさ。
どこかへ行っちゃったらしいわ」
「どこかって、どこでしょう」
「どこかはどこかよ。
あたしが知っていりゃ苦労はしないわ」
「ううううう」
と金之助は唸ってから、
「郷田さんに、是非ともお聞きしたいことが」
郷田は返事をせずに、顔を金之助に向けただけだった。
「噂によると、郷田さんが助けた人物は、麻暮先生ではなく、荒野大三郎だと」
「だれがそんな嘘っぱちを。
まあ、鉄仮面に顔が隠されているから、野次馬には何とでも言えるわね」
「若い女性がふたり、昨日こちらに伺ったでしょう」
「あら、あの子たちがピーククパークク喋ったの。
それこそ、野次馬、門外漢。
漢って、男って意味かしらね」
「知りません。
しかし本当に、助けたのは麻暮先生だったのですか」
声にケンがある。
「金之助さんもしつこいわねえ。
鉄仮面がもし麻暮先生でなかったとしたら、あたしを殺す気なの」
郷田の逆襲に、金之助は押し黙った。
(どちらにせよ、麻暮先生を、いや鉄仮面を探さないといけない)
金之助は、郷田と言い争うよりも、まずは金助に報告することを撰んだ。

この一時間ほど前。

二〇三〇年、七月九日、正午。

猪鹿蝶子は、美村麗子の部屋で、パソコンに釘付けになっている。
パソコンの画面には、ドローンからの映像が映し出されているのだ。
「やっぱり出てきたわね、鉄仮面。
別館を離れて、本館に行くのかしら。
あれ、門の方へ行った。
外へ出てしまった。

しまった、脱出されたぞお」
蝶子の叫びに、うんざり顔の麗子は、
「そんな大袈裟な。
散歩かもしれないでしょ。
それにあの身体で、脱出っていっても何処に行くのよ。
まあ、ドローンを操って、行先をたしかめればいいわ」
「よっしゃ」
蝶子は眼の色を変えて、操作しているが、
「あらら、落っこちそう」
と危なっかしい。
「しかたないわね。
お蝶さん、わたしに貸しなさいな」
「ふん」

「ああ、郷田さんがスープを持って、別館に行くわね。
ああ、鉄仮面がないショックで、スープを落とした。
あっちっち、あっちっち」
「そんなのいいから、鉄仮面の行先じゃ」
「はい、はい。
ええと、いた、いた。
まあ、覚束ない足取りで、かわいそう。
あっちは、鵜沼海岸の方角ね。
身投げでもするのかしら」
「莫迦言っていないで、しっかり操作せい」
「まかせなさい。
ブーン、ブーン、ブーン」
「頼むよ。
頼りにしてんだから」
「ほら、やっぱり、身投げよ。
ほら、見てごらんなさい、ここ」
「どこ、どこ」
「ここよ、ここ。
この海面に沈んだきり、浮かび上がってこないわ」
「まさか」
「ついに、鉄仮面、いえ、荒野大三郎、自殺す。
って、洒落にならないわね」
蝶子は、パソコンの画面を凝視しながら、
(荒野大三郎は絶対に、自殺なんかしない)
と考えた。

(とすると、どこへ行ったのだろう)

二〇三〇年、七月九日、午後三時。

竹田金之助は、〈未来コスモス院〉にいる。

父親の小林金助の部屋にいる。

介護ロボットのタナカが傍にいる。

「小林サン、席ヲハズシマシヨウカ」

「気を使ってもらってすまないが、その必要はない。

いまやタナカ君は、あちきらの仲間でやんすから」

金之助は、先ほどの状況を簡潔に説明してから、

「親父さん、どうしましょうか。

何でもやりますから、自分に指示を与えてください」

金助は深い溜息をついて、

「鉄仮面は荒野にまちがいはないな。

もしも麻暮のだんなだったら、回復後すぐに、うちに連絡をくれるはずでやんす。

荒野の行先はおそらく〈未来計画カンパニー〉だろう。

曾孫の榊美々さんがいまは社長をやっているが、心配でもあるだろうし、秘密の隠れ部屋もあるだろうし。

改めて麻暮のだんなの身が不安だが、海が家みたいな玄治さんが一緒だろうから、もしかするとどこかで助かっている可能性もある。

いまやってもらいたいことは、鉄仮面の行方を探すことではないよ。

黄金仮面の行方を探してもらおうことでやんす。

麻暮のだんなのことだから、鉄仮面を荒野に取られたからには、黄金仮面を付けているにちがいないからな」

「わかりました。

自分はこれから、湘南のみならず、大平洋に面した港港を総て探しまくります」

金之助の力強い返事に、金助は涙を浮かべて何度も頷いた。

この二時間ほど前。

二〇三〇年、七月九日、午後一時。

猪鹿蝶子はまだ美村麗子の部屋にいる。

ふたりは昼の軽食をとっている。

「あんたどう思う」

蝶子が聞いた。

「このドレッシング、たしかに古いかも」

「しらばっくれないで」

「だって、荒野の行方なんか、わたしに解るはずないじゃない。

こうなるとドローンも効果ないだろうし」

「だって、あんた勘が冴えてる人だから」

「誉められて悪い気はしないけど。

悪いけどわたしも今回は勘が働かないわ」

「そうかあ、そうだろうな」

と蝶子がつぶやいた途端、麗子がテーブルを叩いて立ち上がった。

「うひゃあ、何の発作だよ」

「急に勘が働いちゃった。

わたしが通っている〈鎌倉P C学園〉の実質的なオーナーは、〈未来計画カンパニー〉らしいのよ。

いまは榊美々という子供みtainな女性がオーナーらしいんだけど、元オーナーのその曾祖父が、荒野大三郎だって噂があるわ」

「噂どころか、陽羅さんの『巨人荒野』では、そう書いてあるよ」

「なら、お蝶さん。

荒野が自殺したんでなけりゃ、〈未来計画カンパニー〉に向かったんじゃないかしら」

「おととと。

私としたことが、どうしてそこに気づかなかったんだろ。

さすがは我が従妹。

手柄じゃ、手柄じゃ」

「曾孫の榊美々さんの社長業が、どの程度か心配でもあるだろうし。

もしかするとあそこに、秘密の隠れ部屋なんてものもあるかもしれない」

「むむむ。

たぶん〈未来計画カンパニー〉には未練がないだろうけど。

もしも秘密の隠れ部屋とやらがあったなら。

そこには、これからの荒野さんの計画の、資料とか資材が在るかもしれないな」

「さすがは我が従姉ね。

妄想、じゃない、想像力がハンパじゃない」

「妄想でも想像でもないよ。『巨人荒野』を読んだら、陽羅さんが荒野さんを〈巨人〉と名づけた意味がよく解るの。

まったく一般人、平凡人には理解不能なのが、荒野さんという存在なんだな」

蝶子は遠くを見る目をした。

そのあとでこう付け足した。

「ただそうなる時、もしこんど会った時、荒野さんは黄金仮面を付けているだろうな。

『巨人荒野』を読む時、鉄仮面も黄金仮面も、ひとつずつじゃなさそうだからね」

「それで、お蝶さんはどうするの。

なんて聞くのは野暮ね。

わたしも〈未来計画カンパニー〉まで同伴させてね」

「むろんじゃ。

あんた無しでは、私は迷子同然」

「まったく、口が上手いんだから」

「あんたの影響だね。

私はもともと無口で口下手」

「それって、お蝶さんが三歳までじゃな一い。

わたしが生まれた時、お蝶さんの喜びの音がギャアギャア聴こえたもの」

「うそつき」

「陽羅義光ほどじゃないかも」